

筆山

第28号／2000年7月

土佐中・高等学校同窓会 関東支部会報

編集人/西岡 恒憲 (41回)

〒106-0032 東京都港区六本木3-16-12-7F 六本木司法書士合同事務所気付 TEL 03-3587-6200 FAX 03-3587-6201

E-mail: tsuruwa@mxq.mesh.ne.jp 関東支部ホームページ: www.2u.biglobe.ne.jp/~tsuruwa/kantosibu.htm



土佐高校サッカー部初の全国大会出場！12月30日国立競技場の開会式で出場校中最少人数の15人で堂々の行進

哲学中年体験の薦め

32回生 溝渕真清

最近、ちよつと嬉しい体験があった。机の上に息子の本がある。見れば、著者はかつて一緒に仕事をした仲間ではないか。父親としては子供が何に興味を持ち、何を考えているかは、大いなる関心事でもある。

頁をめくってみると、懐かしい名前や言葉が目飛び込んでくる。「彼が私を正しくしてくれた。私のおごりは消滅し、私は人を尊敬することを学んだ。狂わせる程の強烈な衝撃を与えてくれたのはルソーであった」と言うのはカントであり、彼はまた、「流行遅れの馬鹿たらんよりは、むしろ、流行を追う馬鹿であれ」とも言う。「すべての人間は幸福を求めている。人間は考える葦である」のブレイズ・パスカル。「欺瞞と虚妄に満ちた美德、隣人愛などに惑わされるな、自分自身を愛し、信頼せよ」と叫ぶニーチェ、などなど。著者も言うように、かつては私も哲学者であったかもしれない。だからこそ、挑発され、懐かしく夢現の世界に浸れるのかも。何よりも嬉しかった事は、かつて、知的虚栄心を満たすために読んだ頃より、はるかに理解できるようになることだ。年をとることも満更でもないな、とも思う。近々著者と久しぶりに飲んで語りたいものだ。

という訳で、同窓の皆さんに四十、五十を過ぎてからの、哲学中年体験をお薦めしたい。

(参考、「哲学からのメッセージ」「父親の研究」新潮選書)

二〇〇〇年度関東支部総会及び大懇親会

二〇〇〇年度土佐中学・高等学校同窓会関東支部総会及び大懇親会が5月27日(土)にオリンピック記念青少年総合センター「国際交流館」に於いて開催されました。約二〇〇名余の同窓生が代々木の森に参集しました。

今回の記念講演は日本経済新聞社論説副主幹の岡部直明氏(40回生)の「これからの日本経済」と題する講演でした。



記念講演 岡部直明さん



母校からは、森本教頭先生はじめ西峰先生、小村先生、渋谷谷先生にお見え頂きました。



西山本部副幹事長

今回は0の回生(40、50、60、70)の同窓諸君による総会・懇親会の運営がなされました。

来年の総会は、二〇〇一年6月2日(土)に同じくオリンピック記念青少年総合センターにて開催致します。奮ってご参加ください。



溝渕前幹事長ごろうさまでした



大懇親会



司会の70回生 野町啓さん



宮地支部長の来賓紹介



今年卒業の75回生の諸君





ジャンケンゲーム決勝戦



渋谷先生。
サッカー部の監督



西峰先生



小村先生



森本教頭先生



総会裏話

藤原和幸(40回生)

卒業以来、母校関連の行事とは殆ど縁の無かった私ですが、ひよんな事から、関東支部総会の運営担当幹事を仰せつかってしまいました。

毎年恒例となっているそうですが、「土佐中・高校同窓会関東支部学年幹事会」が、今年から2月に変更され、幹事の打ち合わせはこのときから始まり、前回幹事の二宮さん(49 O)、西森さん(57 T)、森本さん(59 H)にもご参加頂きました。事務局として、幹事長の市川さん(53 O)、事務局長の鶴和さん(41 S)、今年度の幹事として、40回生、田村さ



会場下見風景

ん(T)、大石さん(H)、小島さん(O)、北山さん(K)、嘉屋さん(S)、藤原(O)、60回生、御庄さん(O)、広瀬さん(S)、70回生、上岡さん(K)、野町さん(N)が参加されました。

親子程の年齢差のあるメンバーが一緒に集まり、結局6回の打ち合わせを持ちました。市川さんのご好意で、丸の内の森総台法律事務所の会議室をお借りし、平日の6時過ぎ頃から集まりました。不思議とご自身の都合を調整可能な方が多かったような気がします。打ち合わせ中に欠席の方へ携帯での追っかけ確認、Eメールでの連絡、最近世の中便利になったなあと改めて感じさせられたことでした。

また、女性を中心とした70回生による懇親会でのプロジェクトルームによるプレゼンテーションは、頼もしく思われました。

今年の総会もそうだったと思います。幹事長、事務局長さん、大石さんには、特にお骨折り頂き無事終わる事ができました。今回の総会運営で得た幹事経験が後輩へ発展的に継承されんことを願う次第です。

関東支部活動報告

事務局長 鶴和千秋(41回生)

●関東支部総会

関東支部総会は、今年も別掲のとおり開催されました。同窓、来賓一八〇名に今年新たに関東支部会員となったフレッシユマン70名を加え、二百名を超える大懇親会となりました。今年は40回から70回まで、末尾『0』の卒業年次の担当で、懇親会の会場風景をスクリーンに生中継という新しい趣向もお目見えし、母校や同総会に関するクイズやジャンケン大会では、高知、東京往復航空券、MDコンボといった豪華景品を競って、真剣なバトルが展開されました。

記念講演は日経新聞社論説副主幹 岡部直明氏(40回生)による「これからの日本経済」。

母校からは、森本教頭先生はじめ西峯先生、小村先生それにサッカー部を初の全国大会に導いた渋谷先生にお見えいただき、スクリーンに試合の様子が映し出されると、会場は感激に包まれ、校歌斉唱のうちに、一年後の再会を約してお開きとなりました。

今回は、平成13年6月2日(土)今年と同じく、オリピック記念国立青少年センターで行います。

●役員改選

2月26日、学年幹事会が開かれ、任期満了に伴う関東支部役員の新メンバーが以下の通り改選され、総会において承認されました。

支部長 宮地貫二(21回生)
幹事長 市川直介(53回生)
副幹事長 佐々木泰子(33回生)

窪田秀忠(38回生)

岩村康生(41回生)

二宮 潔(49回生)

金澤由里(55回生)

吉井雄二(49回生)

森本隆裕(59回生)

事務局長 鶴和千秋(41回生)

なお選任役員ではありませんが、以下の方々にもそれぞれの専門分野で支部活動を支えていただきます。

顧問

進藤貞和(3回生)

北岡龍海(5回生)

近藤久寿治(6回生)

曾和純一(16回生)

山本高敏(25回生)

浅井伴泰(30回生)

吉野保徳(31回生)

溝渕真清(32回生)

筆山会会長

吉澤信一(16回生)

筆山会事務局長

小島三郎(40回生)

大石和男(40回生)

西岡恒慶(41回生)

筒井康貴(41回生)

同窓会会館建設基金

6年目に入った同窓会会館建設基金は、筆山会、ハチキ

ン会参加の方々や、支部総会出席者、記念講演の岡部さん

等のご芳志により、6月末現在で、金二、一一七、七九五

円となりました。

基金の振込口座は、

四国銀行東京支店

(普通口座番)〇一二三八二一

『土佐中・高同窓会館建設基金』

となっております。引き続き

ご協力をお願い致します。

●サッカー部応援寄付報告

昨年末の母校サッカー部の

全国高校選手権出場に際し、

関東支部の皆様から、三〇六件、金一二六万九千円もの寄付をいただき、大晦日の競技場には三百名を超える方に応援に駆けつけていただきました。本当にありがとうございました。今年も期待して年末を待つことにしましょう。

母校だより

学校長 森田幸雄

関東支部の皆様にはますますご健勝の御事と存じ心からお喜び申し上げます。

学校も新学期開始から既に2ヶ月が経過いたしました。この間県下高校総合体育大会、中学クラスマッチ、全校遠足等大規模行事も順調かつ無事に進行中であります。ここでわざわざ無事にと付け加えたのは最近の十七歳前後の少年達による異常な問題行動に思いを致す時、直接同年代の諸君の教育に当る私達にとつては、この語は折りに似た偽らざる気持でもあるからです。今後とも教職員一致して学力の充実と同時に「こころ」の面でも高い倫理観と強靱さを

備えた人格育成に取り組む所存ですので、何卒先輩諸兄弟のご教示とご声援の程お願い申し上げます。

さて話題としてはいささか旧聞に属すること、既に鶴和事務局長さんから詳しいご紹介も頂いているとは存じますが、重ねて高校サッカー部の活動について一言報告させていただきます。第78回全国高校選手権大会が旧年末から新年にかけて国立競技場他で開催され、サッカー部が県代表として出場いたしました。何しろ初出場であり校内はもとより関係者一同大いに盛り上がりました。特に同窓会、振興会、就中、貴関東支部の皆様やサッカー部OB会の先輩

がたには、地の利を生かして直ちに応援態勢を立ち上げて頂き、動員や募金活動を含め学校側の手不足面や思い及ばない面を十二分に補って頂きました。去る5月27日の貴支部総会には渋谷勉監督(58回生)もお招き頂いており競技の模様も報告いたしましたことと存じますが、学校長として改めて感謝と御礼を申し上げる次第であります。

次に80周年行事とも関連しますが、去る5月14日、中・

高とも記念招待野球試合を実施しました。相手校は宿毛市立片島中学と香川県立観音寺中央高校と共に全国制覇の実績を有する名門校であり、結果は惜敗しましたが、カラーの似たチーム同士であり記念行事に叶う好試合でありました。高校野球についてはそろそろ夏の全国を目指すべきとのご声援も頻りであり、目下監督選手一丸となって、決意も新たに甲子園への厳しい前進に入っております。巷間、無敵明德義塾が最も恐れている相手は土佐だという噂が流れて(されて)おり、是非噂を現実としたいものと願っています。

次に本年度の大学進学状況ですが、現役合格率は今まで最高だった昨年度にほぼ匹敵する74%であり、国公立大合格者数一〇七名も現役としては最多となり、可成の成果を収めたのではと考えています。更に県下高校体育大会(県体)出場選手の合格率約79%(国立医大関係4を含む)は文武両道の校是に叶う結果であり頼もしく思っております。ただ東大、京大等超難関校については現浪を含めて合格者倍増を目指すべく一段と厳しい

取組みが必要という指摘もあり、今後は更に緻密な進路指導を行ってまいる決意です。で適切なアドバイスなり頂けたら幸いであります。

最後に80周年記念行事等に関するのですが、既に創立記念日の前日、11月17日を式典及び祝賀会日と設定、準備に入っております。実施概要は文末一覽表のとおりですが、募金等でまた先輩各位のお力添えをお願いすることも多いと存じ恐縮しておりますが、何卒ご協力の程心底お願い申し上げます。

梅雨期を控え天候不順な折から、会員諸兄弟のご健勝と関東支部のますますのご発展を祈念申し上げ学事報告をさせていただきます。(5月29日)

土佐中学・高等学校創立80周年記念行事の概要

* コンサート

吹奏楽部 4月22日(土)

午後2時 於県民文化ホール

音楽部 秋(未定)

* 招待試合

野球部 5月14日(日)

於高知市営球場

午前11時 中学

(片島中学と対戦)

午後1時30 高校

(観音寺中央高校と対戦) バスケット部

8月26、27日(土、日)

於土佐高校体育館

* 記念講演会 11月16日(木)

於土佐高校体育館

講師 大原健士郎

演題 「土佐人気質」

(予定)

* 記念式典および祝賀会式典 11月17日(金) 午前

於土佐高校体育館

祝賀会 11月17日(金) 午後

於新阪急ホテル

(時間協議中)

* 向陽祭 2月3、4日

(土、日)

「記念事業・その他」

* 80周年記念誌発行

(平成13年1月発行予定)

校史・クラブ活動史・

特集1 「これからの土佐校」

特集2 「土佐校と女性」

* 記念テレビ番組製作

(平成12年11月に二日にわけて放映予定) RKC制作・

生徒制作の2本

* 学校紹介ビデオ製作

* 文芸部「筆山」80周年記

念発行(平成13年1月予定)

* 「土佐中高一〇〇年を考

える会」の立ち上げ

(含 新校舎・同窓会館・校

地拡張)

＊創立80周年記念募金の実施

＊教員研修基金の創設（教育のさらなる充実にめざして）

本部だより

幹事長 岡内紀雄（34回生）

関東支部の皆さんへ、きげんいかがですか。高知も梅雨の季節に入り、断続的に傘マークとなつて、不快指数が上昇しています。

四国の自動車道は、3月11日に川之江JCTが開通して、Xハイウェイが完成、高知から徳島へは2時間ほどで行かれるようになりました。また、高知自動車道は現在、伊野まで開通していて、伊野・須崎間を2002年の「高知よさこい国体」までに完成させるべく、急ピッチで工事が進められています。

土佐の夏の風物詩「よさこい祭り」は、年々盛大になり、昨年は136団体、約1万5千人の規模となる中、昨年から実施した全国大会には40チーム、4千人が参加するなど、今年も昨年を上回るチーム、踊り子の参加が予定されています。

ています。

また、昨年は陸上競技場が工事中で使用不能のため、レーザーなどを利用した750発と規模が縮小された「花火大会」も、今年は50回記念大会ということもあって、打ち上げ5千発のほか、ナイアガラなどの仕掛け花火も予定されています。

今年の同窓会総会は、8月5日（土）に高知新阪急ホテルで開催いたします。みなさんのご参加をおまちしています。

東海支部だより

事務局長 南毅一（37回生）

「袖の白線」のルーツは名古屋にあり」

ドラゴンズが強いと夜が楽しい。ビールがウマイ。そんなまつ最中の5月20日（土）支部総会を開きました。会場のセッティングが悪く、間仕切りをへだてた隣の会合のマイクの声がやかましく、ご来賓の皆様のご挨拶や学校の現状報告やら、大声大会のようになつてしまつて、まことに恐縮しております。村山副幹

事長がドナリ込んで少しは静かになりましたが…。

そんな中、現在東京にお住まいで、かつて名古屋地方検察庁の検事をされていた秋田清夫氏（27回）にもご出席いただき、名古屋時代の想い出話し等していただきました。在職中は名古屋出身のS参議院議員の学歴詐称事件を担当され、再三テレビに出ておられた頃のコワイ風貌とは一変、ニコニコの好々爺になられていました。また、浅井本部副会長、岡内本部幹事長、土田香川支部長、中山広島支部幹事、市川関東支部副幹事長の皆さん遠路ありがとうございます。

それから、元祖スター永野関西支部長にはドラゴンズ連勝の活力もお与えいただき、毎年毎年感謝しております。そして、貴方様がインタビュに答え7回の連載となった毎日新聞夕刊（平成12年3月25日～4月1日）の「審判ものがたり」はそのコピーを後日総会出席者全員に送付しました。特に1回目の「真のファインプレー」の記事には小生のような汚れた胸にもグツとくるモノがありました。

学校からは、浜田教頭先生

からその現況と来年の80周年記念事業の説明がありました。その中で袖の白線のルーツはどうもこの名古屋にあるらしい、調べてくれぬかという依頼を受けました。ナナナナ・ンと、あの栄光の白線のルーツがこの名古屋にあると・・・？東海支部探訪チームが早速動きまわりました。新発見。詳細は同窓会の80周年記念誌か東海支部会報わかしやち6号で・・・。

関西支部だより

幹事 細川喜弘（53回生）

昨年4月、高知新聞大阪支社に赴任。社内の土佐高OBに紹介され、関西支部の幹事に加わったものの、幹事会には一度も出席していない。実に申し訳ない限りです。

できる範囲で報告すれば、

関西支部では昨年、幹事13人を増員、総勢31人となった。数回の幹事会で白熱した議論を経て二〇〇〇年1月15日、梅田の新阪急ホテルで総会を開催。百人近くが集まり、母校からは森本堯士教頭、高知から岡村甫高知工科大副学長

も参加された。

永野元玄支部長、中山真知子事務局長を中心に、今後も盛んに活動していくはずだ。

さて、高知新聞大阪支社の取材活動で、いわゆる「必物」の一つに甲子園がある。大阪支社の記者はスタンド応援席の取材を担当。春、夏、春と3回体験したが、すべて県代表は明徳義塾。監督の特異なキャラクターとその実力から、毎回注目度の高いチームで、高校野球の取材対象としては面白い。何回も通っていると選手の家族や関係者に顔見知りもできる。

しかし、スタンドに高知出身者や高知県人はほとんどいない。高知新聞の記者としては、応援に集まった県出身者や学校OBという風景も見たい。明徳を嫌うわけではないが、こころの甲子園のうち8回出場という独占状態は、少し極端だ。

この春には高知県出身者が一人もベンチ入りできなかった。試合を戦ったのは全員、大阪など県外出身。中学校の野球部でなく、学校と無関係のシニアリーグで硬式野球をやっていた選手ばかりだ。

昭和60年ころの明徳のエー

ス山本誠氏(宿毛市出身)は「僕らのころも県外のシニアリーグ出身者がいたが、県内の中学出身の方がうまくて、結局試合に出るのは値内勢だった」と振り返る。

つまり、明德に入ってくる県外勢はレベルが上がりが、県内の中学野球はレベルが下がった、と考えられる。せめて2回か3回に1回は明德以外の学校が甲子園に行くという状態になれば、県全体のレベルも上がるだろう。

さて、その明德が近年最も苦手にしているのが土佐。3年前の秋には寺本、高橋両投手のいた明德相手に一時は6点リードしながら、延長戦で負け。昨年夏の大会(秋の県予選のシードを決める公式戦)でも、延長戦に持ち込んだ。この夏はどうか。甲子園で皆さんに会える日を楽しみに・・・。

広島支部だより

幹事 横川清志(40回生)

「母校野球部広島遠征記」

母校野球部が昭和63年以来12年ぶりに広島遠征にやってきました。遠征団は、部長に

小島哲雄先生、監督に三木一宏先生(65回生)、コーチに藤井満さん(46回生)・小栗健さん(49回生)です。監督は前回の遠征に部員として参加しており、久しぶりの広島となりました。この欄では、5月3日の広島商業との試合をお知らせしましょう。



合田投手の力投

土佐高校の投手は横手投げの合田瑛典君、広島商業は左の本格派の岩浅君でした。岩浅君は広島県でも屈指の好投手であるが、合田君はやはり打たせてとるタイプであり、回数を重ねることにそれがリズムとなり、スライダー、沈む球のコンビネーションよろしく、打てそうで打てなくな

る投球は見応えがありました。広島支部からも多数応援に駆けつけました。

試合そのものは、8回までは好勝負で2対1と勝っておりましたが、9回広島商業が先に崩れて3点取って5対1となり、勝負あったかに見えましたが、その裏、逆転負けを喫しました。一死を取る難しさというか、勝ちに行く詰めの難しさを改めて教えられることになりました。ここを乗り越えれば甲子園も夢ではないでしょう。なお、「全力疾走」は健在であるの言うまでもありません。

香川支部だより

事務局長 武山正人(40回生)

関東支部の皆さん! こんにちは。香川支部は発足4年目に入り、そろそろ支部運営を軌道に乗せるべく、みんなで頑張っております。

ところで四国は、念願の三橋時代を迎え、この三つの橋をいかに活用すべきか、そのためにはどうしたら良いかなどと、いろいろな所で活発な議論がされています。今年3

月11日には4県都を結ぶ高速道路(通称エックスハイウェイ)が開通し、各県の人々の交流が、ますます盛んになってきています。松山・徳島間の高速直通バスが良い業績をあげている話を聞きますと、今まで交流の少なかった地域が直接結ばれた効果が少しずつ出てきているように思われます。いよいよ四国各地から高知へ「車でチョッと日帰りゴルフ」という時代になりました。しかし、香川支部のある高松市では、これまで「四国の玄関」とまで言われていたのが、これからは一通過都市になってしまい、またこの不況下から地元経済の先行きを不安視している向きも少なくないようです。

関東支部の皆さん! 故郷高知はもとより、四国香川も忘れずにどうぞよろしく願っています。

最後になりますが、本年度の役員改選により、香川支部は以下の陣容に変わります。

支部長 土田哲也(32回)
幹事長 宮地正隆(36回)
事務局長 武山正人(40回)
事務局連絡先 四国電力(株)電力部 野村喜久(54回)

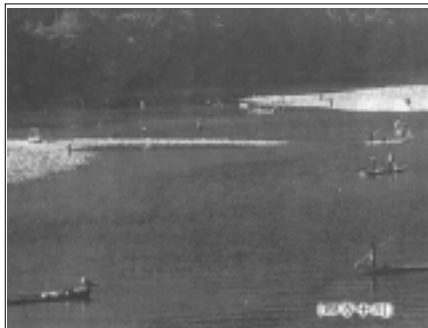
TEL 087-821-5061

龍馬も、鯨も待っている
ふるさと高知

暮らしいきいき、ビビッドバンク

高知銀行

東京支店 中央区八重洲2-6-21 (電) 03-3273-3061



第78回全国高校サッカー選手権大会観戦記

サッカー部OB 織田祐輔 (45回生)

99年12月31日仙台育英戦。試合後の打ち上げはまるで祝勝会

大晦日の夕暮れ、まるで祝勝会のようなJR稲毛駅前居酒屋天狗での光景であった。



再来年は今の中3が高2で中心メンバーになるきに来るかも知れんのか」

「なんと」言ったうち占目が入ったに良かった。7点取られた言っても初出場で2点も取ったがじゃきようやったと言ったもんよ。上等ぜよ」「そうよ部員が15人、3年が4人、2年が2人のチームでここまでまっことようやったぜよ」「もしかしたら来年も来るがじゃないろうか?」「いやそりゃ欲張りすぎじゃけんぞ、

騒動の始まりは1本の電話から

11月14日(日)夜、親友でサッカー部OBの高松在住北村伸一君から電話があった。

「サッカーが勝ったぜよ」

「なんぜよそれは」「全国大会の予選や。正月にそっちであるろが。創部以来初出場ぜよ」「そら大事じゃいか」

「関東のことは織田にやってもらやあええきに」と先輩らが言いよったぜよ」「何をやらなにかんがじゃろうか?まあそのうち何か言うて来るろ」と言うような調子でこれからの大事さがさっぱり実感できていない私でした。

ところが何もしていない私のところへ12月1日(水)になって浅井伴泰さん(30回生 関東支部顧問、本部副会長)から電話があり「明日土佐酒蔵で応援等の段取りの緊急打ち合わせをやることにした。関東では当然あなたがやりゆうろうと思うが他の人も誘い合わせて来てくれんろうか。たまたま高知へいんじよって学校へ行って寄付集め等の段取りもしてきた。筆山も急遽指示して編集し直して1ペー

ジをサッカーで割いた。寄付の振込用紙も入れることにした」と矢継ぎばやのお話。OBとしてのだらしなさに恐縮しながら冷や汗をかいたり、先輩方のご配慮に感謝したりの応対でした。

それを皮切りにその後は毎日応援の段取りやら支部会員への連絡やら打ち合わせやら寄付のお願いまわりやらに明け暮れ、ただでさえ暮れで忙しいところへ昨年末は自宅の引越、Y2K対策も加わり目の回るような忙しさでした。サッカー部は全国大会は初めて、しかも大掛かりなチームゲームの関東での大会も初めてで分からないことだらけでしたが、甲子園の野球応援の経験を持つ諸先輩方等のアドバイス、ご支援のお陰で何とか格好がついたと思います。

開会式、堂々たった15人の入場行進

1回戦は12月31日と決まったが30日の開会式から出てくるOB会門那会長(31回生)から先輩方も居ると言う話になり、前日国立競技場へ集合して選手ご父兄とともに声援を送ろうとの話になり有志の方々で出向きました

各チーム登録選手枠25名一杯の大会進であったが(他のチームはこれに選ばれるのも大変らしい)土佐はたった15名、他チームの半分ちよと位でこじんまりで皆多少緊張の面持ちではあったが、元氣よくメイinstand真中に陣取った大応援団(?)の前を白地にエンジのマークの校旗を先頭に堂々と行進して行った。

この時初めて本当に母校が出場したんだとの実感が湧いてきました。



明日に試合を控えるOB諸氏は競技場内の食堂で早速杯を重ね昔の自慢話などに花を咲かせながら「もしかして明日勝つことがあるだろうか？ほんなら？同戦は何時じやろう？」等と本気とも冗談ともつかない感じで何時までも話が弾んでいました。

上がっていたが、初々しい爽やかイレブン

さて試合当日は千葉方面は少し怪しい雲行きで、朝雨もパラついたようですが、昼頃から良くなり、14時10分の試合開始を前に懐かしい同窓の面々が千葉県総合運動場に集まって来られました。用意していたチケットが足りなく



なる程で300〜4000人位の応援団で盛り上がりました。



試合は やはり緊張していたのか攻め込んだところでボールを奪われ開始早々2分に先制点を献上したが「まだまだこれから、落ち着いていけ」の声も飛んだ。少し落ち着きを取り戻したか危ないながらもよく守りFWも前田、松田らがよくひっぱり仙台ゴールを脅かす場面も出て来た。同点に追いついて1対1で前半を終えればあわよくばと思い始めた矢先、28分に2点目、33分には3点目を取られさすがに溜息が漏れた。しかし、このままでは終わるはずがない。37分に山崎が意地の1点

を入れ前半を1対3で終えた。ハーフタイム応援席では「まだまだいける。これからじゃ」との声が飛び交い後半に期待をつないだ。

意気軒昂な応援が現役応援



団 卒業生一体となって元気に繰り広げられ、応援では仙台育英を圧倒していたものの1年生の多いチームと言うこともあり劣勢となつて行つた。後半は次々に加点され終了間際には1対7になり「流石にもうこれまでか」と思われた。その時、仙台デیفエンダーの一時隙を突きエース松田が2点目をもぎ取った。2対7。最後まで諦めない戦い振りにスタンドが沸いた。次に繋がる大きな1点であった。

応援団も大満足、終了後千葉の夕暮れの空に向陽の空が高らかに流れて行つた。

また来いよ、今度は勝者で校歌を歌おう

有難う。思わぬ夢を1900年代最後の日に与えてくれた15人の選手。育ててくれた国見部長、渋谷監督ら学校関係者。応援してくれた同窓生諸氏。

次への期待が芽生えてくる良い試合であった。次は本当の勝者として大きな声で向陽の空を歌いたいものです。宴会を終えてY2K対応で出社の途につく大晦日の夜道、何とも言えない嬉しい気持ちになりました。



いつまでも、心に残るおつき合い。

ぐんぐんバンク

四国銀行 東京支店

〒101-0047 千代田区内神田1-13-7
☎03-3291-3411 FAX03-3291-3913



島崎和歌子

介護のプロを目指して

篠原由紀子 (57回生)

高知で暮らした日々と東京に出てきて過ごした日々がちやうど同じくらいとなりました。社会人としては、もうすっきり一人前……のはずが、私は、この4月から、これまでとまったく違った職業につき、新人として働き始めたばかり。介護保険の導入と時期を同じくして、東京郊外にある特別養護老人ホームで介護の仕事を始めたのです。

大学を卒業して、一応人並み(?)に働いていた私が介護の仕事に興味をもち始めたのは2、3年前からです。それまでは、介護は身近な問題ではありませんでした。私は祖父母を早くに亡くしているし、幸い、家族も健康に暮らしているのので、「社会の高齢化」とか「介護保険」というニュースを見聞きしても、なんとなく遠いことのような気がしていたのです。

そんな私に、たまたま仕事で、デイサービスや訪問入浴サービスなどさまざまな介護サービスについて取材する

機会がありました。病気や高齢などによって日常生活に支障をきたすようになった人々とその介護をする家族との間には多くのドラマがあり、一方でプロとして介護のお手伝いをする介護職の人々にも職業意識を超えた温かい思いがある。それが私にはとても強烈でした。生活に密着した介護の現場を目の当たりにして、吸い込まれるように「私もこの場において、人と直接的に関わりた」と強く思うように



講座最終日に一緒に学んだ仲間と(右から2人目)

なったのです。

それで、一念発起して介護の勉強をすることに。とはいっても全日制の専門学校に行くのは経済的に無理があるし、自分の性格では通信教育は続かないだろうし……あれこれ考えた結果、働きながら夜間の専門学校ホームヘルパー2級養成講座に通うことにしました。驚いたのは、介護を学ぶ男性が意外と多いということ、それも年配の男性が積極的に取り組んでいるのです。第二の人生は介護をしたい、と勉強しているうちからホームヘルパーの登録をして働いている男性もいました。一緒に学ぶ仲間がいるというのは刺激的で、やる気を持続できたのは仲間がいたからこそと言えるかもしれません。みんないろいろな情報交換をしたり励まし合いながら、半年間で無事に講座も終了、晴れてホームヘルパー2級の資格を取得しました。

次は、就職活動です。新卒者でも就職が厳しいこの時代、年齢のことを考えると、そう簡単には仕事は決まらないだろうと、腹をくくっていました。今年に入って、福祉人材

センターに登録し、学校にも就職相談をし、新聞の求人広告には毎週チェック、知り合いの人にも「何かあったら教えて」とお願いしておきました。そして、運よく、今の職場と出会えたのです。

さて、私の新しい職場ですが、利用者約一〇〇人という一般的な規模の特別養護老人ホームで、事務職やパートの方も含めて職員はおおよそ60人。誰もがフル回転で働いています。ホームヘルパー2級の資格をとったといっても何せ新人の私、毎日が緊張の連続です。働き始めて2ヶ月が過ぎた今でも、対処に困ることがしばしば。ホームは利用者にとって生活の場ですから、神経を使う場面も多く、肉体的にも精神的にも厳しい職場だと実感しています。それでも、利用者の名前と顔が一致するようにになり、それぞれのくせや性格がわかってくると、楽しいこともあります。私の名前を覚えてくれた方がいたり、食事の介助をしている時に笑顔を返してくれたりと、うれしくてついつい張り切っています。

先日、上司から「仕事の流

れを覚えたら、それから先は自分で仕事を作り出していくこと。利用者が安心して楽しく暮らせるように工夫するところがこの仕事の醍醐味ですから。楽しくするも、つまらなくするも、あなた次第ですよ」と言われました。この言葉を心に刻んで、介護のプロを目指していこうと思います。



専門学校の仲間達と(最前列左端)

幹事長就任の「挨拶

市川直介 (53 回生)

この度、土佐中・高同窓会 関東支部の幹事長に就任しました。幹事長就任にあたり、自己紹介を含めた挨拶をさせていただきます。

私が土佐中の門をくぐったのは、昭和47年の春。木造の旧校舎の最後の年でした。入学直前、父が岡山に転勤が決まり、「岡山に来るか」との問いに、「せっかく高知で一番いい学校におつたから、土佐に行く」と答え、父の勉強させたい期待とは裏腹に、土佐中の野球部に入部した。父は、岡山に単身赴任。

当時監督だったのは、故岡村熊長先生。熊長先生に出会って、野球の厳しさと楽しさを真剣に教えて頂いた。「おんしゃあー」で始まる説教といつまで続くか分からない厳しいノック、グラウンドや道具に対する愛情、とりわけ、熊長先生がひとりで新グラ・旧グラを手入れしていた姿は、

それだけで何かを語っていたように思います。試験近くになると、熊長先生の自宅で勉強させられたが、熊長先生の奥さんが作ってくれるラーメンがおいしくて、それを楽しみ

にお邪魔していた。

中学時代に、肘を痛めてしまった私は、高校で野球できるか悩みました。でも、土佐高で野球をやりたいという気持ちは押えきれず、「野球は中学まで、高校は岡山に来て勉強しろ」と言う両親を当時高校野球部の監督だった籠尾良雄先生の自宅に連れて行き、籠尾

先生を交えて「土佐高で野球をした」と話し合いました。以降父は、何も言わず土佐高に行くことそして野球部に入部することを許してくれました。

籠尾先生との思

い出は、この紙面では語り尽くせません。父も母も、私が土佐高での野球生活を経験できたことを籠尾先生に感謝しています。母は長年野球部の寮母として手伝い、今でも私以上に籠尾御夫妻と交流をさせて頂いています。

高校になると、母と妹は父の勤務する岡山に行き、野球部の寮生活が始まりました。

毎朝、午前6時に起床、体操の後約8キロ（新グラウンド40週）のランニングそしてウェイトトレーニング。練習後は、風呂と夕食をすばやく済ませると、午後8時から午後10時まで補習授業がありました。学校の授業中は、居眠り常習犯ですが、寮内での補習は眠



れず厳しく、補習が終われば、道具の手入れや素振りをしていました。それから宿題等学校の勉強をする？（わけがな

いか・・・）。同期には、宇佐中の片田統途君（現在NTTコミュニケーションの総務部）、滝川中の伊藤滋宏君（現在東京電力本社の広報部）らが入部し、この若き1年生両投手と玉川寿さん（慶応大、日本

石油）に代表される強力打線で、春の選抜大会優勝の高知高校等を倒して、甲子園に出場しました。また、秋の四国大会で徳島商業と延長での惜敗が評価され（私のポテポテのライト前ヒットで同点、延長となる。チームに貢献したのは、3年間の野球生活でこのくらいか・・・）、春の選抜大会に選ばれ、甲子園に夏春連続で出場しました。

高校3年の夏、高知商業に負け、涙を浮かべて高知球場を去るとき暖かい拍手・声援は今でも覚えています。スタンドから「市川ようがんばった。これから勉強がんばれよ」と。

現在、70名を超える弁護士が所属する森綜合法律事務所（大手町）のパートナー弁護士として、企業買収、倒産、株主総会指導等企業法務全般にわたって執務しています。

土佐中・高等学校は、今年で80周年を迎え、各界で活躍している卒業生が数多くいます。また、母校を含め学校も21世紀に向かって様々な問題が山積しています。自由闊達な雰囲気のもと、勉学、スポー

ツ、芸術等様々な分野で最高のものを目指す土佐高同窓生が次々と育ってきて欲しいものです。

同窓会は、卒業生同士の親睦と、学校への物心にわたる支援の2つの目的があると思っています。どの世代の卒業生も、母校を通じた友情に裏打ちされた親睦が図れ、足を運びたくなるような同窓会組織にしていきたいと思っています。また、

いつまでも、誇りに思える母校でありつづけてもらいたいとの熱い熱い卒業生の思いを学校の発展の為に生かす施策を考えたいと思います。なにぶん若輩の新幹事長です

ので、多くの卒業生の支援・協力なしでは、この大役を勤め上げることは不可能です。様々な機会に、叱咤激励の程よろしくお願い申し上げます。

最後に、長年幹事長を勤められた溝淵真清氏（32 回生）並びに会計監査を勤められた山本高敏氏（25 回生）および吉野保徳氏（31 回生）に対して感謝の意を表するとともに、今後とも顧問として引き続きご指導、ご助言をよろしくお願い申し上げます。

戸田博之君のこと

市原真仁 (38回生)

『おーいピカソ、二基かや?』

そんな声が今にも聞こえてきそうなのに、彼は突然遠くの世界に逝ってしまった。今までも海外出張やら国内単身赴任やらでせいぜい年に数回しか会えなかったのも、今度の同窓会ではまたあいつの唄を聞かされるのか、なんて、つい考えてしまう。しかし、あのバイタリティにあふれた、偉大な男はもういないのだ。

僕のことをピカソと呼ぶのは、同級生の中でも戸田と中西正夫の二人だけだ。なぜ僕がピカソなのか知っているのも多分一人だけだ。あいつと最後に会ったのはいつだったろう。当たり前のことだが、これが最後だなんて思っているわけがないので、そのときにどんな会話をしたのかさえ定かでないのが本当に悔しい。

思えば、あいつと出会った土佐中時代、あいつはいつもきちんと折り目のついたズボンで颯爽としていて、姿勢が良く、体操をやっている生真面目なギターもひいたりして、山田の田舎でしかも運動音痴の僕にとっては憧れの男

だった。

彼と同陽新聞部に入り、高校では同じTホームとなり、広田塾にもいっしょに通うようになって、僕にとっては彼は生涯の親友の一人となった。お母さんにもずいぶんお世話になった。小さい頃にお父さ



後列右端が戸田さん。そのとなりが筆者

いるが、これは、優秀な土佐高生であった筈の僕らの単なる白昼夢かもしれない。

彼は又、僕と違ってずいぶん大人でもあった。裕次郎の唄をギターで奏でながら、しっかりと彼女を口説いたりもしていたのだ。

ブラジルでの6時間マイク独り占め、それ以来のカラオケ帝王はつとに有名だが、彼の家にお伺いしてみると、きちんと整理された写真帳や愛用のカメラや、彼の手作りの素晴らしい家具などに在りし日の戸田君が偲ばれて、「おう、ピカソ、来ちゃったか」と今にもそこに現れそうな気配であった。

突然の死は周りの人々に強烈な衝撃を生む。悲しみはあとからゆつくりとやって来る。彼の遺灰はお母さんの時と同じように土佐湾の海にまかれる予定とか。我々もいつかは彼の後を追うことになるが、その日まで、皆で思い出を語りながら冥福を祈ろう。

筆山元編集長 戸田博之氏

(38回生) は本年2月にこ

逝去されました。謹んでお悔

やみ申し上げます(編集部註)

戸田さん追悼

藤宗俊一 (42回生)

『後は頼んだぜよ』

戸田さんの訃報はあまりにも突然でした。新聞部の先輩として、また『筆山』の前編集長として、そして何よりも頼りがいのある人生の先輩として面倒をみて頂いた私には、今でも信じたくない出来事です。

初めて出席した関東支部総会の席で『よう藤宗君、元気にやりゆうかよ』と、押しの強い声を掛けられたのが十数年前。編集会議の席では、皆に意見を十分言わせ、適切な指針を示してから『じゃあ、後は頼んだぜよ、藤宗君』と言って、夜の街に繰り出し、自慢の喉を披露して皆を楽しませてくれた。

新築祝いに編集員を呼んでくれたが、ご自慢のカメラとアルバムと奥様を披露されて、家の方まで時間が残らなかつた。毎朝必ず故郷の母上に葉書一枚書くことを日課にしているとの話を聞いて、とてもかなわないと思つたのもこの頃だった。何から何まで自信に満ちあふれた戸田さんだった。

その彼から『ブラジル支店

長になった。悪いけど、後は頼んだぜよ。』と言われた時は驚いたが、3年すれば帰るといふし、軽い気持ちで引き受けた。しかし、彼の本当の偉大さに気がついたのは編集長を引き受けてからであった。

『後は頼んだぜよ』となかなか言えず、仕事を抱え込んで首が回らなくなり、何度『足の裏から』の原稿依頼のFAXに「早く、帰って来て下さい」と弱音を書いたことだろうか。

3年たつて帰国されたものの、東京を素通りしてそのまま水島勤務となられ、私の方もどうにもならなくなつて、編集長を投げ出してしまった。大政奉還が果たせなかつた事を、本当に申し訳なく思っている。

この文を書いていると再び、戸田さんの『後は頼んだぜよ』という自信に満ちた声が聞こえてきそうな気がします。本当は、こんな形で聞きたくない言葉ですが、これから先、精一杯頑張ります。

勿論、奥様や、お嬢様にはしっかりと聞こえていらつしやることでしょう。心より、ご冥福をお祈り申し上げます。



去年の4月中旬ごろ。はなしに聞いた築地場外市場に出かけてみた。そこなら美味しい鰯が、それも手ごろな値段で食えるだろう、などといじまじい本音もあった。

午後二時には閉まるという市場の雑踏の中を分けて、めざす鰯屋を探しあてた。幸い手の出ない値段でもなさそうで、安心して注文した。

「お待ちい」という威勢のいい板前の声とともに、目の前に脂ののったマグロの握りがきた。その鰯を摘もうとしたとき、私の手にもうひとつの見えない手が重なった、と思った。

その手は、つい先日読み返した志賀直哉の小説「小僧の神様」の主人公仙吉の手だった。

小僧の仙吉は、番頭の噂する美味しい鰯をひとつでいいか

ら食ってみたい、と日ごろから思っている。ある日使いに出て、電車賃の片道分四銭を浮かして、念願の屋台に入る。仙吉が板の上の鰯を摘もうとしたとき、主人は、ひとつ六銭だと言を押し。仙吉は黙って鰯を戻して外に出る。その仙吉の手を私は感じたのである。

小説のこの件(くだり)の描写で、その場に居たまればなかった仙吉の屈辱を想っ

泣き虫 弱虫 怒り虫

十回生 立仙浩一

て私は胸が痛んだ。

同じ大正時代に育った私も、貧しくて中学の修学旅行に行けなかった口惜しさを味わっている。仙吉は少年の私の分身でもあった。

とも角も仙吉の手をふり切るように、仙吉に代わって食べた築地の鰯は、トロけるようにのどを通った。私が築地ゆきを思いついたのも、鰯を食い損なった仙吉への記憶が心

の底に残っていたせいだろうか。

鰯屋を出て市場外を歩いてみた。八百屋の店先に走りのソラ豆を見つけた。食欲をそそるみずみずしい緑色だ。一袋三百円、か。築地は矢張り安いナ、と感心する。下さいナ、とカミさんが袋を手にとると、アレ、千三百円じゃないか、何だ袋が重なっていて千の位がかくれていたんだ。今更引つめない、つい買ってしまった。三百円なら安い、と悦んで買うが、千三百円だと考えこむ。所詮私たちはそのレベルの庶民だった訳だ。四銭の鰯を元に戻した仙吉と些して変りはない。高いソラ豆をつい買ってしまった私の方が仙吉より勇気がなかったことになる。

スシとソラ豆

結局はるばる出かけて築地の買い物はソラ豆一袋。家に帰って茹がいて食べた。一粒いくらになるんだなどと苦笑しながら味わったソラ豆は、美味しくて、高い買い物だったことはもうキレイに忘れていた。

小僧の仙吉も連れて回ったような、築地場外市場の老人の一日散歩だった。

★出版レーダー★

◆24回生 大原健士郎

『精神鑑定 18人の犯罪病理』

(00・02) 講談社 1600円

『病める家族 その精神病理』

(00・01) 講談社 680円

◆29回生 竹内靖雄

『家という迷信…超民営化のすすめ』(00・03)

日本経済新聞社 1600円

『日本人らしさとは何か』

(00・03) P.H.P研究所 857円

『「脱」宗教のすすめ』

(00・01) P.H.P研究所 720円

◆30回生 鍋島高明

『今昔お金巻しぐれ』(00・05)

河出書房新社 1800円

◆34回生 田島 征彦

『いたずらとさきチュローチュ』

(99・10) 童心社 1300円

◆34回生 田島征三

『日の出の森をたすけて…子どもの未来を奪うゴミ処分場』(00・03)

法蔵館 1600円

◆36回生 大橋一章

『ばけものでら』(00・02)

教育画劇 1200円

◆36回生 大橋一章

『図説敦煌』(00・03)

河出書房新社 1800円

◆37回生 野田正彰

『気分社会のなかで…神戸児童殺傷事件以後』(99・12)

中央公論新社 1850円

◆41回生 黒鉄ヒロシ

『新選組』(00・01)

P.H.P研究所 857円

◆41回生 森崎初男

『これから始める経済学・経営学』(共著) (00・04)

東洋経済新報社 1700円

◆51回生 坂東真砂子

『道祖土家の猿嫁』(00・01)

講談社 1800円

『山姥(やまはは)』(00・01)

新潮社 514円

◆54回生 川崎清嗣

『やっかい老人と付き合う法』(99・12)

光文社カッパブックス 829円

◆55回生 森岡浩

『高校野球甲子園全出場校大事典』(00・03)

東京堂出版 2800円

メールボックス

足長おじさんありがとう

吹奏楽部顧問 鎌田圭子

関東支部の皆様、昨年末、12月31日に千葉県でのサッカーの試合に応援に来ていただき、ありがとうございました。皆様と共に、歌った校歌と応援歌は、本当にうれしく、一生の思い出となることでしょう。私は、今、吹奏楽部の顧問をしており、47回生、鎌田圭子（旧姓、岩貞）と申します。

今日は二つ、お礼を申し上げます。一つ目は、2年前関東支部の方々のご尽力により、土佐高同窓会より、吹奏楽部へ楽器をご寄付いただいたことです。丁度その頃は、コンクールで失意のどん底であった時だけに、部員一同の喜びはたとえようのないものでした。でも、おかげさまでそれを機に、部員は丸となって練習に励み、それ以来ずっといいことが続いております。そして、二つ目は、『足長おじさん』へのお礼を申し上げます。やりたいのです。ややもすればマンネリ化しそうなクラブの

練習ですが、そんな時、必ず「部費の足しにして下さい」と、送り続けてくださった方がいらつしやいます。「高輪局」の消印のみしか手がかりがなく、多分、関東支部の方に違いありません。このような形でしか、私共の感謝の気持ちをお伝えできず、残念な思いをしています。でも、練習に励むことが、ご恩に報いる唯一の方法と思い、いつも部会の初めに「私達を陰で支えて下さる『足長おじさん』に感謝を込めて、今日は練習をしよう、いいサウンド創りをしよう。」と言っています。

おかげ様でここ一年の吹奏楽部員の向上心は目覚ましいものがあり、昨年のコンクールで金賞、県代表をいただき、念願の四国大会出場の夢がかないました。また、初出場の吹奏楽祭でもサウンド賞、アンサンブルコンテストでの金賞と続いております。そして、今年は、高文連による全国総合高等文化祭に出場が決まり、8月に静岡に行く予定をしています。

昨年のサッカー部の全国大会への応援参加、そして今年の全国レベルの文化祭への参加が、生徒達を全国大会へ出場したいという意識に変えて



いってくれることでしよう。それだけの才能を持った生徒たちが集まっているのです。同窓会の皆様のおかげで、パーカッション部門がやっと充実し、少しずつですが金管楽器もアップさせていく予定です。楽器がよくなることで、音色も生徒の意気込みも変わってきました。

昨年のスプリングコンサートでは、世界的トランペッターのエリック宮城さんをゲストにお迎えしました。そのビデオをお預けしますので、興味のある方は見て生徒たちのパワーを感じてみてください。そして、どうかこれからも温かく後輩たちを見守っていただけますよう、お願い申し上げます。

関東支部の皆様が母校への熱き思いを感じ、他の教職員一同とともに、土佐高校を守り、発展させていきたいと思っています。

足長おじさんありがとうございました。皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

母校創立80周年記念招待野球観戦記

清谷知郎（52回生）

じつとしていられない。先約が入っていたのだが早々とキャンセル。気がついたらフアリと市営球場に来ていた。スタンドに腰を下ろすとすぐに声をかけられ、振り返ると1年後輩の市川直介君だった。甲子園でプレイした野球部OBの弁護士と、それをアルプス席から応援していた応援団長出身の開業医が仲良く母校80周年のゲームを見ているなんて、他の学校では滅多に見られぬツーショットかな、と思うとおかしくなる。

土佐中・高校は勿論のことだが、招待校の片島中、観音寺中央高校も同じように純白のユニフォームをまとって全力疾走していた。非常にキビキビした印象を与えて清々しいが、挟殺プレイの時には紛らわしくて困った。母校が久々に甲子園に登場すると、必ず相手校がつかれて、序盤戦は攻守交代の時間が短くなる。しかし5回裏終了後のグラウンド整備の時には、もう敵は全力疾走することが難しくなっているのだが、この日の2校は最後までやり通していた。

熱のこもった投手戦の第1試合、積極的な攻めが運を呼び込んで片島中が快勝を収め

る。籠尾先生に記念品を贈呈するセレモニーでは、4校がフィールドに並んでいたが、遠目に見ると殆ど見分けがつかないのだ。小雨のバラつく中、ブレイボールの第2試合。全般的に大柄な観音寺中央は迫力があつた。特に粘りに粘って四球を得た打者走者が、一目散に一塁へ駆け行く様子は、体じゅうに野球ができる喜びが溢れているようだった。

汽車の出発時刻が迫って5回裏終了時に席を立つが、「よし、これで試合は成立だ!」と妙な屁理屈をこねて市営球場を後にした。翌日の高新で確認すると0対3、2対4で遠来のチーム、そう、四国の北東と南西の果ての対角線からはるばるやって来た2校に花を持たせていて、「何と奥ゆかしいことか。」と少しだけ嬉しくなった。夏を期待しよう。

〔2000年5月15日記す〕

2対14の悲劇

清谷知郎 (52回生)

もちろん東大進学者数が学校のレベル評価のものさしではない事は重々承知である。それにしてもライバル学芸に7倍という大差を付けられて

わずかに2名とは実に悔しい。私の同級生のF君などは担任に「先生、ボク、東大理科と医科歯科の医学部と慶應義塾の医学部と全部合格したけど、どこ行こうか?」などと尋ねていたという。「お前みたいな奴のせいで俺は・・・」と彼の耳元で金属バットの素振りでも始めたくなるが、それほど優秀な成績を取る奴の存在は珍しくもなかった。

私は「土佐高応援団長を努めると2浪する」というジंकスを忠実に守って某4流私立医大へ進んだが、52回生全体を見るともう一つの嬉しいジंकスをちゃんと守ってくれた。即ち「甲子園出場を果たした時の進学実績は素晴らしい」というものである。もう既に8名も鬼籍へ入ってしまったが、卒業生のうち20人に1人が東大に合格し、7人に1人が医者・歯医者になったのだから「伝説の41回」には及ばずとも校史に残る好成績と呼べるのではないだろうか。それが今やどうだろう。

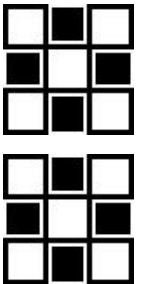
サッカー部こそ去年はいい夢を見させてくれたけど、野球部は「高知県人が一人もいない高知県代表校」の厚くて高い壁に甲子園を阻まれ続けて

いるし、進学成績も寂しい限り。愛する応援部もいつのまにか「限りなく廃部に近い休部」状態だと聞いているのだ。ここいらで文武両方にテコ入れしなければ「いにしえの名門校」として23世紀の甲子園で「この全力疾走というのは高知のある学校が有名でしたが半世紀も前に廃校になっちゃいましたね」なんて辛いコメントが流れるかも知れない。

決して優等生でもなく片田舎の町医者として暮らしている私だが、土佐高に対する愛着と誇りだけは誰にも負けないと考えている。2対14。悔しい、寂しい、情けない。常々我が子「だんごっ鼻三姉妹」には「父ちゃんの出た学校は高知県で一番の名門校なんだよ」と言い聞かせて育てているが、現状が続けば白線の制服に袖を通した時「父ちゃんの大ウソツキ!」と呼ばれるかも知れぬ。

蘇れ土佐高よ! 21世紀へ向けての全力疾走を高知の西の果てから祈っている。

〔2000年4月18日記す〕



40回生同期会

岡部直明 (40回生)

同窓会に行くと、たいていは集まった同期が年寄りくさく見える。自分が年取ったことはすっかり忘れて、久しぶりに会う同期の白髪や禿頭にばかりつい目がいってしまう。ところが、土佐高40回生の関東地区同窓会はその例外だった。卒業して35年近くになる99年12月18日、東京・銀座の土佐酒蔵に集まった32人の



何とはつらつとしていたことか。

土佐人ならではの声の太さは昔と変わらず、そのうえに知性の年輪が輝いていた。マドンナたちの美ぼうには磨きがかかっていた。そこには団塊の世代の先駆けとして、時代の荒波を生き抜いてきたたくましさがあった。中高年の同窓会といえは、健康の話、家族に見捨てられた話、犬猫の話、そしてリストウの話と、暗い話題に向かいがちだが、話題は未来に向かっていった。

例えば、N君が提唱した「土佐勤老党」構想は、多くの賛同を得た。年を取っても、もっと働きたい。それもこれまで生きてきたように単に競争するばかりでなく、人間らしく個性を生かして誇りをもって人生の仕上げをしたい。そう考える同志を集めようという壮大な構想だ。

昔をなつかしむ同窓会も捨てがたいが、二十一世紀に向けて気心知れた仲間のネットワークを広げる場になれば、もつといい。これまで同窓会にはあまり顔を出さなかった身でありながら、こんなことを考えるのは年のせい、それとも若さゆえか。

暖かい日差しの中、4月14日第7回土佐高OG会（はちきん会）が新日鉄代々木倶楽部で開かれました。この日のナイト、山中氏（24年生）は、モダンな服装で登場。28回生から70回生までの女性達とは相変わらず元気いっぱい。楽しい会となりました。

28回 山本純子

今回のナイト山中和正氏の夫人、雍子さんと、小学1年と6年の2年間を共に潮



江小で学んだ仲間であり、夫人のお顔と重ねながら、夫ら興深くお話を伺いました。戦災前、同小と土佐中は小川を隔てて隣にあり、川越しに見た弓道の練習風景が、脳裏に刻まれています。若い仲間から声をかけられたり、クラスメートと久々に顔を合

土佐高OG会 愛称

せたりと初参加でしたが、楽しい時を過ごさせて頂き

33回 島村真智子

中高教諭をしていて、今、面前にある生徒は、人間になる前の何かのように感じられます。その自我は海流に乗って浮遊するくらげに似て、かつて自分が同じ人生の時を過ごしたとは信じ難いほど、実

ハチキン会

在感がありません。土佐の同じ学舎にあった人々と触れ合う時、霞か靄をすかすようにしている日常が途切れて、中等教育と人生のあり方を考えさせられます。同性の方々に、自分を見つめ直してもいます。

58回 松田芳男

4月14日、私にとっては2度目の「はちきん会」でした。

「はちきん」が「さんきん」くらいにパワーダウンしていた私は大先輩である壺坂さんにお誘いを受け、また突然の参加を快く迎えて下さった佐々木先輩からもお電話を頂き、代々木クラブへと向かいました。ところが、さすが「はちきん会」。大先輩方を始め70回生の後輩達まで正に自由気ままにしかし和気藹々と、誰もが生き生きと輝いていました。そんな中で時間を過ごすうち私もいつの間にか「はちきん」パワー満ち！これからもこの素敵な会を続けて下さい。そしてまた是非参加したいと思った帰り道でした。また、次回はちきん会、楽しみにしております。



70回 葛根由香

はちきん会に参加し、感じたのは、土佐の先輩方には、それが内に秘められたものであれ、明らかに外に発散されているものであれ、本当にパワーがある方が多いということです。わたしなどは圧倒されていました。また、はちきん会に参加する楽しみのひとつに、普段あまり足を踏み入れることのない場所に行ける、ということがあります。次回は三菱クラブだそうで、それもまた楽しみです。

この会はいつでもご入会大歓迎です。

佐々木 (33) TEL&FAX 044-955-0562
E-mail hiro_art@muc.biglobe.ne.jp
金澤 (55) TEL&FAX 044-954-7581
E-mail apse@blue.ocn.ne.jp
西森 (57) TEL 03-3408-1454

編集後記

中野 徹氏 (40回)
望月一憲氏 (6回)
平成11年3月9日
戸田博之氏 (38回)
平成12年2月21日
阿部辰雄氏 (30回)
平成12年4月20日

「南千住まつり in 東京」という催しが五月中旬に京王プラザホテルであった。第1回というので、出かけてみた。

高知出身の三百人くらいが、乾杯のあとワッペン料理に群がり、鰻のたたきや半時間になくつた。私はスライカ一切れにありつくのがやっと。果人パワーにはおそれい。吉祥寺に「高知屋」という県のアンテナショップが開店した事も披露された。

(G)

ある日突然、知り合いの女子高生に「なぜ学校で勉強するの?」と聞かれて、私はうまく答えることができなかった。私は高校生の時に勉強することに対して疑問を持ったことはなかったような気がする。勉強は毎日の日課のようなものだと考えていたのか、それとも入試のためだと割りきっていたのか。などなど、彼女の質問に答えなくて、自分が当時どんな気持ちで授業を受け、机に向かっていたのだらうと思いつけている日々が続いている。

(T)

お悔やみ申し上げます